

## 今しかできない経験

経営情報学部4年 藤田 朱夏

「経験は力になる」これは私がこの大学4年間を通じて学んだことです。振り返ってみると、私の大学生活は短いようで長い、とても濃い4年間でした。

私は大学に入学する少し前から、よみうりランドでアトラクションを動かすスタッフとしてアルバイトを始めました。遊園地には多くのお客様が来場し、一日に少なくとも200人、多い時には5000人以上を相手に接客を行っていました。日々の接客業を通じて、把握能力、判断力、コミュニケーション能力を身に付けることができました。よみうりランドで働いた時間はお客様の笑顔を直接感じることで、日々の成長を実感できる貴重な経験でした。

大学2年生から3年生までインターゼミのデジタル・トランスフォーメーション（DX）班に参加し、研究活動に努めました。研究をしていく中で、知識の獲得だけでなく、物事の調査方法や正しい情報の読み取り、自分の意見を言語化するスキルも身につけることができました。インターゼミでの研究活動は、今後社会に出て必要になる力を得る事のできる貴重な経験でした。

さらに、2、3年生では新入生に向けた入学前教育プログラム（アクティブ・ラーニング）にも参加していました。コロナの影響で通常の活動が難しかったため、学生主体でコロナ禍にできることを考え、パンフレットや学生目線の情報を載せたサイトを作成しました。この活動では、自分で考えたことを実行し、形にするという一連の流れを経験することができました。

大学4年生では、大学のアルバイトに初めて挑戦をしました。木曜日午後のリレー講座のアルバイトと、オープンキャンパスのスタッフを行いました。リレー講座では地域の方と、オープンキャンパスでは

高校生と関わる事ができ、新しい関りは多くの気づきと経験を与えてくれました。特にオープンキャンパスでは、高校生と直接話す機会が多く、彼らの悩みや疑問に応じることができました。この4年間の様々な経験から、高校生の相談にも臆せず対応することができました。

ここまで私が大学4年間で得た経験を振り返りましたが、私の言いたいことは、「遊べるうちにたくさん遊んで、学べるうちにたくさん学び、少しでも気になったことは一ミリも遠慮せずに挑戦してみたい」ということです。目の前に自分の今まで体験したことのない経験を得られる機会が訪れたら、それを見逃さずにチャンスと捉えて挑戦してみてください。経験から得た知識や力は、いつか自分自身を助ける力になるはず。私の大学生活は終わりを迎えますが、社会に出てからも新しい力を得るために、これからも挑戦と経験を続けていきたいと思っています。



インターゼミ（箱根合宿）での中間発表



アルバイト先で仲の良いスタッフ達と



入学前教育（AL）で新入生に向けてインスタライブを実施

## 言葉を届ける

グローバルスタディーズ学部4年 世安 爽愛 さちか

私は一人でも強く生きていける。これは入学当初の城壁なるプライドと偏見を持った頭の硬い私の決意です。しかし、その決意は心の弱さでいとも簡単に崩れてしまいました。そんな私を支えてくれたのは、周りの人たちの言葉でした。そこで輝けるかどうかは自分次第だと教えてくれた友人。ネガティブな発言をする私を受け入れて、一緒に頑張ろうと言ってくれた仲間。覚悟を持って努力すれば、どちらの夢も実現できると背中を押してくれた教授。爽愛は卒業まで頑張れると信じて応援し続けてくれた祖父母と両親。挙げ出したらキリがないけれど、人間一人では生きていけないのだなあ。と周りの温かい一言で実感させられる毎日でした。大学生活の中で、自らと向き合う時間が増えたことで、自分がどういう人間で、何が好きで、何が嫌いかということがよくわかってきました。そして考えや価値観を言葉にする力は、こんなにも大切なのだと気付かされた4年間でもありました。

大学に入り、今まで知っていた世界はあくまで一部に過ぎないと知った頃、自分の心と調和が取れず落ち込んでしまった時がありました。同時にまた環境のせいにしてている自分がいると気づきました。その時「輝けるかどうかは自分次第」という言葉を思い出し、大学生活を少しでも好きになれるよう行動してみました。読書が好きだったので、選書ツアーに参加してみる。教職課程の仲間と教職支援室で課題に取り組んでみる。あれ、意外と楽しいぞと思い始める自分がいました。前向きな考えを、言葉に、行動にしてみたことで、日常の見え方が変わってきました。正直、落ち込むことが8割、心躍る出来事2割だったけれど、その2割が私の大学生活を輝くものにしてくれました。大事なことはなんでも面白い！と思う気持ちと、どんな感情の時も「ありがとう」と「ごめんなさい」を忘れないことでした。

多摩大ジャーナルのお話をいただいた時に、せっかく読んでいただけなのであれば、読んで良かったと思ってもらいたいと考えました。ここで話が壮大になってしまいますが、人は繋がりがないと感じると生きる意味を見出せなくなると私は考えています。生死までいかなくても、学校に行く理由がないとか、別にどうでもいいやとなってしまう気がしています。実際に私もそうだったから。しかし、絶対にその人の存在が誰かを救っています。私はあなたのことが大切ですよと言葉にすることは恥ずかしいけれど、何かの節目に伝える日があっても良いのではないのでしょうか。言葉は凶器になる一方で、誰かの心を救えるのです。友人であり本当の優しさを知るその人は、私がいくら弱音を吐いても、信じ続けてくれました。そのおかげで真っ直ぐに追いつけられたのだと思います。ありがとう。私は、多摩大学グローバルスタディーズ学部に入學したのはご縁があって、間違いではなかったと感じています。この4年間は喜怒哀楽様々で、その割合は人によって違うけれど、どんな自分も受け入れてあげることで、心が軽くなるのかなと思います。完璧な人なんて地球上にも宇宙にも一人もいないです。最後まで読んでくれた方へ。ありがとうございます。またどこかで。

